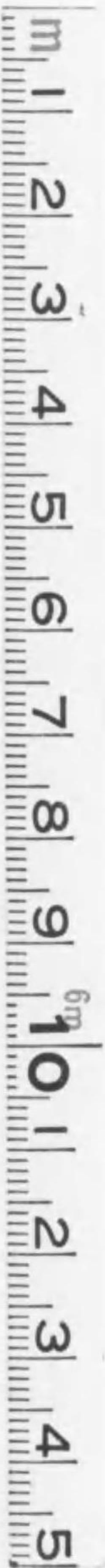


飾磨叢談

始



飾磨叢談第三號

○雜報

岸良判事へ去る十月廿五日大審院々長仰付々色しと○東
 京裁判所檢事局長犬塚盛魏全所詰擧事今非良一の兩君の
 藤田一件取調とし去る十月廿七日よ警視第三課へ出
 張せたる趣○俳優市川左團次ハ東京築地の文海學校延
 築費の内へ百圓寄附せしむ付銀盃一個中村宗十郎ハ全五
 拾圓寄附せしむ付木盃一個賜ましたと○大坂寄留高知
 縣士族の岡軌光といふお人の官民の閉柄といふ一小冊の
 出版と願わさしむの題號の宜しかたすと内務省おく聞届
 々々色さりしものバ今度改めく餘民の間おと題しと再願
 さるるといふ事○先達く東本願寺へ賜はりし勅額と宮内

省よく法主の代理篠原教正へ御渡しおあるや直ちよ教正
 の新橋の潔車も乗りく出立晝夜兼行し三晝夜おぬお西
 京へ着させたを法主の深く之と懺戴せさせ速お門徒一全
 へも宸筆と拜ませべきおきと該宗よい嚴重ある法則あき
 ば今年報恩講の終りよ奉告式と舉行し法主自かた之と祖
 宗お告げ其きより之と門末一全お拜ませたるよと云ふ○
 喋々噂の高ありし藤田組の一件おつき獨逸人某お大坂新
 報と相手取り告訴せし一件い調べの上無罪と申渡させ記
 者い大愉快を居る由○兵庫縣改租掛りの出張所い全縣舊
 支廳のうちちよありし處去月三十日よ船場龍野町二丁目
 元西治屋某の明家へ轉せさせし○目今普請中ある福中橋
 と來ル十日頃よと通行お出來升と○本州元女學校の跡へ

設々ありし飾東郡檢疫所い最早コレラモ撲滅おけき去月
 三十日限り閉鎖せさせましよ

○金港堂の騒亂

書バ筆の汚き聞バ耳の汚きともある野蠻嘶しい攝津國八
 部郡兵庫淡町お住む金港堂と稱せる書林の主い今年三十
 六七才よ女房子と二人の外よ父いおとし五十五六才よ
 十六七才ある丁稱一人と召使ひ四五年以前より商買とい
 じめし人あるお去ル十月廿七日午前三時頃雇人の丁稱お
 鐵の棒と以て寝入し老人の喉へ突き入を老人い即死せし
 主人い眼とさまし取押んとしと十四ヶ所の傷とら倒せし
 し隙よ丁稱い二階の窓より逃出し全所漆橋の上おく巡查
 お見咎めさせ夜中走ると尋せしお私しり金港堂の雇人

なるの強盗の這入し故親類へ報知するありと云へり
親類へ行ふ及ばぬ直に捕縛すべきに付金港堂へ案内せ
よといひ是是非非なく門口まゝ案内せしむ直く其事の發
覺して其場を縛り死しとの氣味の能いよし

○田淵おさめの話

五体不足の所の無くとも心ひとつの足らざるより身と
誤るゝ至るもの世は多しといひふものゝ今説く一件の物
語りの播磨國揖東郡北横内村といふ所は田淵おさめ(今年三
十七年)といふ者あり以前に全村田淵小太郎といふ者の妻
とあり一人の女子も産まざり夫婦の中さへよるふねば
遂々縁の糸もさき小太郎の家を出しに四五年前のよしと
るよしのお爲といふ者の顔形ちい並々さきと心いちぢく

り痴漢よくものいふさへも荒々しく男増りの婦女ありと
く果さぬ人もさき程ありし彼の小太郎と離別よりお
さき村内に住居ともとめ少しの貯へ金もあきり萬小間物
紙墨油蠟燭烟草と取交せり並べ立たる小商ひ氣安く暮せ
し其頃今のようもあつたさき人目もよふもおとさし
あるの隣りに在所お上構村とく林田町と軒と並べ一村落と
あせし所お森上久太郎といふ者あり性質墮弱よし了簡
よかふぬ雄の子ありし彼のあためが少しの貯へ金ある
まると聞くより種々様々と奇策と廻りしおかし中とあ
りし頃い明治十年三月のよとなるこの久太郎のさるも
のあきどもお爲もまた堅意地者よく容易のよしお誑さ
さざりしお流石婦女の體とらさきあつたさかためさ

へいゆしる久太郎のいふ
 儘とちど二世も三世と契
 り合月日と送る其折の
 久太郎い老母一人あ
 るさきど故あどく外よ
 住居一獨り暮しの氣儘
 と幸ひお爲と我家へ
 引移させうまくえめ
 かのうさくとお金
 と奪ひととむやと深
 き工みのあるとも知
 ぬお爲の方よ通ふうち



ある夜の閨の睦おとの更くまなく
 の音も余所お互お替るあわむと
 たりと久太郎いお爲よむか
 斯うしく居よい氣安うあ
 永く樂しみ暮すよりほかお
 まと聞くまいかとお云へば
 たわなもあ女房のわたしお
 何事あんば至らぬ私しるも
 々々外よまたあつとたまる
 事假令如何様あまとあり
 ん女房よあ小遠慮さあ言
 い笑と含みもうまそや切
 胸のうち思いかの久太郎

奇と云出さねバお爲いせき立問詰らきく久太郎の煙管引
奇せかためおむるのい一ぶくついろと差出を跡のとをし
追々また

○浮き女の薄情

豈ちのくま欺さきく無益金つかふ痴漢のあろふか昔と
かどり今の世の息子ハ親父お輪とからく万事巨細お行届
元是非と論じく理屈を責めた釋伽や孔子の五意見の百も
承知千も合点と得意然たる自惚も金銀の先立花街の常嬉
しごふまざる事甚だかさし唯入替り立のどり金と運んる彼
花街と賑わし自分バ日々ぬる味噌汁思へバおもへバ馬鹿の
極阿房の至きり盡せりあらずや茲は播州寺家町おかもじ
と商賣古谷さと(五十八年)の夫清介お死別をくより十二年

の星霜と操のどすそおせし何分婦人の手一つよく二
人の子供と養育し近所隣家の附合より親族知音の接りま
る良人在世の時おのどす人おみくお爲るものお次
第お家も冷落し今其日の烟さへ細々とありなきバ早ふ
此世と子よどたし家とおまし身と立させんとさま心
とくるしめしお是といふ目途もあなきバ長男の龜松も髪
結職と習とせんとく亡夫の朋友神戸元町通一丁目散髪職
由五郎と深くたのみ弟子分よしと龜松とつあせしお親
のまゝろ子知らずで何時しか悪しき友と交り色の街の
福原へ一度足と踏入をしより長永樓の小重といふ中年増
の股間もまめつらなき情神と天外も轉宅させ雨の降る
夜も雪の夜もと深草の少將摸疑を通ひつめたるわけくの

果はい小重こしげと連つき郭くわくわての々あち素もとより醜みにくき男おとこおと殊ことお昨きのう
今こんの山やま出だしもの三平さんぺい二満にまんも痘痕あせなも婦人おんなと名なの何なにくも
のの皆みな龜松かみまつと忌嫌いきらふも小重こしげのな名なたるる娼妓おいらんおと起たくく芍薬しやくやく
薬居やくいきき牡丹ぼたんの美人びじんあるが何様なにかした柏子ひやくしの瓢ひょうたんたんやや縁えん
のの異い奇きものたたるるくくふふむむしもハテ世よの中なかハはそそききくくと人ひとの
不審ふしんも思おもへども龜松かみまつハ業平なりひら然ぜんとしく小重こしげの手てとしり故郷こきやう
へかへへどかくかくきく居いささの十日じふにちををあり日ひと過とししく小重こしげハ夜よ
の間まも姿そでの見みへへも龜松かみまつハ狂氣きやうきの如ごとく毎日まいにち々々あちこち彼所あそこ是所ここと
ささのししく居いるるうち長永ながなが樓ろうハ此事このことととるるぎぎのの々々あちこちととふふくくか
め松まつハ掛合かけあふふく小重こしげの前借まえか卅圓じふごうげんと催もよほし取とりししのの小重こしげハか
ねく言いかかとせし情郎じやうらう河内かひのち國松くにまつ原産はらうま色の庄吉ぢやうきちととまめし合あせ
しもののと見みへ二人手ふににても手てと鳥とりののおおくく東京あづまのかかさへ隨德寺ずいとくじ

ときめさ事ことの漸や々やととかり龜松かみまつハくくやしやしささおおままささ戀こハハままさ
よ朝あさの夕ゆふまを泣なく居いるとサア是こ色故いろ息子いきこ達能たつね々々慎つとみ
色街いろまちの身みとほろほぼぼを大敵たいてきと恐怖おそれ玉たまへく轉ころをぬぬささきき杖つゑ
だかだかかチチニ

○貞操ていそう縁えんれれままの第三回 瓢亭主人稿

ひかひままの萬事まんじのの儘まもも桂かつらと科かく炊かき玉たまと科かハハく喰くひ
富貴ふき雨あめささのの得あたりたりしも今いまハ一炊いっしの夢ゆめととささめめく幾層いくそうハ苦く
勞ろうと重かさねねししより俄にわかハ多病たひやうハ體からだととかりかりよよりりととくくたるたる清五
郎らうも不意ふい伴頭ばんとう忠介ちゆうけ嘉藏かざう等らの來きくくさまさまくくハハおおちちぐぐささむむるる心
根ねハ真身まみハ染ぞみみくく嬉うれしく覺おぼへ聊いさか病やまいももおおたたままししかかハ朝
まだまだささより起出おきだて庭にわの千草ちくさハハおおくく露つゆととちちおおめめ居いたるたるハ獨
言ことアア、誠まことハナアハナアああの白露しらつゆと見みるるハハ今いまハ朝日あさひののハハ川がはる

時の忽ちに消る果敢きい
 ものと人間の目への見ゆ
 きども又人の身の上と
 天地の見る時の露
 よりもこの命わづら
 お生る假の世を惜しい
 欲しい可愛くいい皆煩
 脳と知りあかす迷ふ凡
 夫のあさましさとうそ人
 よくまきさり嘆きぬ様
 一生とおくりたいもれ夫を
 よゆ々くも忠介や嘉藏めか



昔しよるるあの心切とふやう様子有そふなア、く
 否々是も矢張凡夫の迷ひ素の悪人をもい何なるとき心と
 改ため善人もあるのも知色ぬ悪よりよきの善おも強ひ悪
 ふの爲まのママ彼等又親子三人の身と也だねたあ聊安
 心を所もあるといふ時表へ入来るの東京二子の立縞羽織
 同じ着物お博多帯紺前だきの短あきも當世風の商人体是
 かん忠介嘉藏あり清五郎の前よりうづくまり先達ハ旅中故
 心急まり染々とおとちしも申しませせ遺憾あつ引取ま
 しさの其後のいろくと兩人しく相談遂げ何様かなと存
 まそきと差當能思案も出を彼是をるうち西京の伯父の
 思ひす参りましとツイ一寸譚ましさの幸ひ高家のおやし
 死な女中と深くさのしとおさる尤お氣おめしさなう直

よお側室よ成さるかつもり夫故とんと能のちかひとの噂
 是幸ひお嬢さんとおわけなさきバ往々の御身の爲若御承
 知ちかお伴としく今日よも歸京とると申しますかお伯父
 も同道御相談よまはり升たと信義と盡そ有様お清五郎夫
 婦のうちよろまひ伯父某よも面會しく細々このみ娘おき
 みよ俄よ旅の用意よさせ身の養生あどさまぐと残る方
 ちく言さとし門邊よ送りいづきバおきみりゆとぐと眼
 と告げ表よさし立出よと輪廻の絆お引さきと盡ぬ名残
 のやるせちく別れとおしみ送る身より送る身ハ初旅
 の物のちえくく目よ涙哭音と忍ぶ親鳥の雛お別るし思ひ
 よく氣もよへぐよ鳴鐘の無常の風よ響き來く耳と貫ぬ
 く午の刻氣よ取直し別を行

姫路人情ノ一斑

姫路柿山伏花柳醉史投

抑モ宇宙間ノ各國到ル所トシテ民アラザルハナシ其粗暴
 傲慢タリ伶俐活潑タリ卑屈棹朴タリ浮薄懶惰タリ固ヨリ
 其歸テ異ニス然レドモ其性棹朴ナルモノハ頑陋ニ流レ恰
 惻ナルモノハ奸猾ニ走リ顯微ナルモノハ浮薄ニ陥ル各地
 各方至ル所皆ナ然ラザルハ無シ而シテ我地方人情ノ如キ
 ハ人々虚飾ニ走リ伶俐ヲ外貌ニ假裝シ衣服飲食華美ヲ極
 メ好猾風ヲ成シ浮薄俗ヲ成シ結合會同ノ氣風ニ乏シク進
 取活潑自主自任剛毅忍耐叙往有爲ノ精神ハ地夫拂ツテ去
 ルガ如ク只管小成ニ安ソフ眼前ノ毫利ニ汲々致々トシテ
 更ラニ將來ヲ慮ラズ報國盡忠國益ヲ計ラズ民權論者ヲ目
 スルニ粗暴ヲ以テスルコ至ル嗟呼吾輩ノ指目スル所ノ民

權論者ハ果シテ此輩卑屈社會ノ粗暴論者ナルカ慷慨悲憤
 ハ果シテ不平怨恨ナルカ自由權利ハ果シテ我儘勝手ナル
 カ吾輩洛陽ノ小年ニアラザルモ豈ニ爲メニ長大息セザル
 ナ得ンヤ稀ニハ能ク書ヲ解スルモノアルモ孔丘チ天トシ
 孟軻チ地トシ文チ綴レバ正謹直柳揚波淵照應婉曲曰ク放
 膽曰ク小心猥リニ韓柳蘇政チ學ンテ其範圍チ離脱スル能
 ワズ是レ全ク異誠ナル人間天賦ノ主見チ抛擲スルモノニ
 シテ甘シテ韓柳蘇政ノ糟粕チ嘗メ或ハ道德チ講シテ天
 下ノ形勢社會ノ秩序政治ノ利害法律ノ得失ノ如キ今日ノ
 急務ニ至ツテ毫モ明知スル所ナク憐ム可キ五里霧中ニ彷徨
 シテ獨立自任ノ氣力ナクシテ是ノチ死學ト云フノミ
 然ルニ自ラ以テ足レリトナシ小成ニ安ンシ塵埃ノ中ニ浮

遊シ滋垢ノ間ニ徜徉シ鬱然トシテ清流ニ游泳スル能ワズ
 卑屈無氣ノ社會ニ沈淪シ怡トシテ耻ザルモノ、如シ豈咄
 ヲ性事ト謂ワザルチ得ンヤ是我地方一般ノ形情奈何ソ
 之チ慨嘆セザルチ得ンヤ其能ク書チ解スルモノモ唯ダ韓
 柳蘇政ノ文体チ模擬スルニ熱心シ實際ニ於テ適切ノ議論
 チ吐ク能ハズ徒ラニ文法ニ拘泥シ虎チ描キテ成ラズ却テ
 犬ニ類シ識者論士ノ爲メニ腐儒迂生ノ嘲笑チ招キ而シテ
 尙ホ怡トシテ知ラザルモノ、如ク民權自由ノ貴重ナルチ
 了解セザルニ似タリ然レドモ理論ニ敏捷ナルモノハ實際
 ニ痴鈍ニシテ實際ニ明ナルモノハ理論ニ暗キハ時ノ古今
 チ論セズ洋ノ東西チ問ハズ海ノ内外ニ關セズ皆全轍ナリ
 奈何ソツ獨リ之チ我地方ノ人ノニ責ムルチ欲センヤ西

哲言ヘルコトアリ曰ク卑屈心ハ矯ム可シ迂遠心ハ矯ム可
カラズト格ナル哉是等ノ徒ハ自ラ奮起シテ精神ヲ活潑ニ
シ天賦ノ權ト人文ノ自由身體行爲營業發言出版奉教政治
等ノ自由權ヲ云フヲ擴張スルニアラズンバ他人ノ誘掖ヲ
待テ決シテ矯正シ得ベキニアラザル也

編者曰我地人情ノ嘆ス可キ吾輩嘗テ山陽新報第四百号
第五百号ノ兩紙ニ於テ之ヲ論シタリ然レドモ我地方該
紙ヲ讀ム者鮮シ故ニ重複ノ誹謗ヲ恐レズ今又コレヲ抄
略シ以テ貴社ニ投ス

可憐可笑ノ田夫

在播姫市外散人投

喰置ト寢置計リハ成ラナイモノト俚言ニモ聞及ヒシガ之
ニ反シテ茲ニ言フ所ハ播磨飾西郡蒔見村ノ農民ニ有坂義

藏ト云フモノ有リ年齢三十六七才ナルガ偶々農事ハ余暇
アレバ山ニ入テ薪ヲ採リ市ニ出シテ以テ其徳益ヲ謀ルニ
畫辨當ノ爲メニ貴重ノ光陰ヲ費ス事ヲ哀シムト雖ヒ去リ
速又喰ワサルヲ得サルハ之レ舊慣ノ然ラシムル處ナリ左
レハトテ之ヲ疎ニモ成リ難クトテ攝生不長ノ斟酌モナク
忽チニ狡猾心ヲ興起シ惟フニ一日三回分チシテ一回ニ服
食セハ我業極メテ衆ニ越ユベシトテ毎朝米一升二合チ一
釜ニ焚キ一度ニ之ヲ食シテ以テ山野ニ入り明朝ニ至ラサ
レハ柿一ツダモ喰フ事ナシト嗚呼山間ノ農夫斯ク其業ニ
従事スルモ身體保全ノ緊要ナル攝生ノ道ヲ知ラス可憐可
笑可愛サト可笑サヲ混淆セラ一書ヲ投シ貴社叢談ノ餘白
ヲ埋ツム

○ド、一

可笑亭主人投

○ 鯨釣りだし溜倉させく沃頓の湯屋をもひたきたい

○ 暇を藝者も人力車のつくおくと悪る走りめ

○ 犬も喰おひ二人をらんくとまくり査公も連ささる

○ 記者も罰金鯨も地震投書も没書の無たりやよみ

定價三錢五厘

明治十二年十一月十三日出版

兵庫縣平民

編輯人

加古義一郎

播磨國新東郡姫路福中町
四十九番邸寄留

兵庫縣平民

出版人

飯田慈一郎

全國全所郵便局三丁目
五番邸寄留

終

